

まんだら通信

第154号(通巻186号)

平成21年(2009)04月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
http://www.shiunji.org/
Mail post@shiunji.org



西横渚の入定祭り

土地の人なら誰でも知っている、入定様こと西春法師。
その縁日『入定まち』の四月十五日が近づきました。

早くも百姓や漁師の祭りに相応しく、事です。

子どもの頃には、学校から帰って友だちと連れ立って行くのが楽しみでした。勿論、お目当ては梯子や鎌とか種子ショウガや夏野菜の苗などではなく、綿菓子や金魚すくいなどでした。

インターネット上で『西春法師』で調べると、沢山の記事が見つかり、それぞれ少しずつ内容が違っていますが、共通していることは青木区原田の生まれで、俗名を武田長治といい、子ども時代から不思議な術を持ち、漁師になってからは海の上を歩いたり、空中に浮いたりという超

能力で人を驚かせたという逸話があります。

十九歳で出家して清澄山の阿闍梨、勢誓に師事して「照哲」の名前を貰い、基礎的な修行の後、自ら号を西春と名乗って、高野山や奥州地方など各地で修行を続けて十年。

故郷に帰ってみれば、悪疫が流行して皆困り果てていました。

これを救うためには入定すること以外に方法はないと決心して、先ず五穀断ち十穀断ちの木食行を三百日の間行つたのち、自ら石の室で禅定に入り「私が叩く鉢の音が聞こえなくなつて三年経つた時、私を室から出してお堂に安置して欲しい。」と言ひ残したそうです。それは今から約三五〇年前の一六六七年、寛文七年二月一八日のことでした。

然し村人は塚に触れることを恐れて、その遺言は果たせませんでした。西春法師の願ひに承えて流行り病は治まつたということでした。

村人はこのご恩を忘れず、毎年縁日に供養の行事を絶やしたことはありません。昭和二七年だつたと思ひますが、沢山のお塔婆を供えて例年より大きな行事をしたことを憶えています。確かめたわけではありませんが、三〇〇年の節目の縁日だつたと思ひます。

今年も前日の一四日、長さ一二尺の大塔婆を供え、地区の人たちと一緒に法事をします。

法師はまた「私は入定して空に昇り、布良の沖に輝く星になるだろう。この星がよく見える時は必ず時化が来るから、決して漁に出ないように。」と言ひ残したそうです。

これが『布良星』で、竜骨座のカノープスという明るい星で、南の水平線ぎりぎり現れるということ、滅多に見ることが出来ないのだそうです。

今年も花祭り



ずつと前から、花御堂の花は名倉の親戚、作エ門から山のように届きます。今年も西横渚の『こびい』さんからも、どつきりと届きました。

写し方が下手で良く分かりませんが、今年の花御堂は、活きの良い花で埋め尽くされました。

七日に孫達が来て手伝いました。昨日当日の八日は、皆さんがお参りに来て下さいました。

「私が生まれたところはネ。」と、お弟子のアーナンダさんに自慢されたというルンビニは、雪に輝くヒマラヤ山脈を北に望む風光明媚なところだ。

百年前再発見の時には、鬱蒼とした密林だつたそうです。三十年前、私が初めてお参りした時は広い平原で、当時の面影を感じました。世界文化遺産指定後、一昨年訪れた時にはすっかり様子が変わって、出店と人がやたらに多い普通の観光地になっていて、土地の人は喜んでいて、ガツカリしました。

ようということでした。今はもう痛みは全くないので、暮らしに支障はなくなりました。

◆どこかで見たことはありませんか。そう、麻生さんの胸についているあれです。北朝鮮に連れ去られた拉致被害者を救う、強い気持ちを表すバッジですネ。

他人の家に土足で乗り込んで、人を連れ出すなどという無法を許してはいけないと、私も思います。『救う会』という言葉でインターネットで探すと、すぐわかります。1個500円です。

2009/04/09 龍渉

余滴



◆萌えるという言葉そのままに、野山が一斉に明るい緑に色づき始めました。

島の脇などで今一番目立つ野草は、明るい赤紫のカラスノエンドウですが、それより遙かに小さい同様な花があります。花の大きさはやっとなら3センチほど。スズメノエンドウ【まめ科ソラマメ属】です。名前の由来は「カラスより小さいから」だそうです。何だかなあという気がします。◆昨日、山門の日本ミツバチが巣別れました。予て用意の巣箱に取り込んで、喜んでいたら逃げられてしまいました。盛岡のミツバチの先

生に電話したところ、暗くなるまで待つべきだったと言われました。でもまだ季節が始まったばかりだからと、自分に言い聞かせています。◆今年になってすぐの頃から、胃の辺りに違和感がありました。痛みが強くなってきたので仕方なしに千倉の野崎さんに行きました。「再発かも知れませんが覗いてみましょう。」と先生に言われました。

案の定、立派な胃潰瘍だそうです。それも丁寧に2ヶ所。7日にまた内視鏡検査をしましたら、傷は治っているけれども暫くの間、薬を続けまし

にっぽん人情小噺 第四十話 下駄

最近、不景気になりますと、なんだか暗い話題が多くなりますね。

でも、よく考えてみますと、私たちが育った昭和二十〜三十年代前半は、一部のリッチな人たちを除いて、みんな貧しかったけれど、心だけは豊かだったような気がします。

涙を垂らしている子もよくいましたね。袖でその涙を拭くもんですから、その子の服の袖がテカテカに光ってましてね。

学校も楽しかった。夏休みになると、ラジオ体操がありましたね。毎朝、首からぶらさげている出欠表にハンコをつけてもっています。

なぜか、防火用水なんていうのが町内にあって、ボウフラが湧いてましたよ。夏の夜は「蚊帳」がなんだかうれしくて。

家庭の中心は、お母さん。白い割烹着を着て、朝から夜遅くまで働いていた。子どもたちが寝る時には、お母さんは繕いものや内職をしていましたよ。朝、目が覚めると台所に立っていましたよ。みそ汁のいい匂いはいまでも忘れません。

「行ってきまーす」

「はい、行ってらっしゃーい」

お母さんは、いつも割烹着。そんな時代の話をテーマにした中村ブンさんという人の歌「かあさんの下駄」聞いたことがありますか？中村さんがご自身の体験を歌にしたそうです。今日は、その歌を物語にしてお送りしましょう。

主人公は「僕」です。「僕」は小学五年生。家は貧しいですが、とても元気な男の子です。ほかの家庭と同じように「僕」はお母

さんが大好きでした。でも、ひとつだけ気になっていたことがあります。

それは、お母さんがいつもすり減った男物の下駄を履いていることでした。買い物に出かける時も、近所のおばさんと外で話している時も、父兄会で学校に来る時も、お母さんはベタペタの黒い鼻緒の下駄を履いているのです。

「お母さん、なんでいつもそんなベチャンこで、男の下駄を履いているの？」

「僕」が尋ねると、お母さんは「だって、これしかないんだもの、しょうがないじゃないの」と言って、明るく大きな声で笑っていました。

でも、「僕」は、お母さんのように楽しそうに笑うことは、どうしてもできなかったのです。

そんなある日、「僕」は町の下駄屋さんで赤い鼻緒の下駄を見つけました。値段を見ると、とても「僕」が買える金額ではありません。第一、家が貧乏だから、おこづかいだって一銭ももらえなかったからです。

（そーだ！）「僕」は名案を思いついたので

そして、小学六年生になったある日、新聞紙に包まれた新しい下駄を両手で抱えて、息を切らせて家に帰りました。

「ただいま！」と言って、「僕」は、威張って戸を開けました。お母さんはいつものように内職をしていました。

「おかあさん、はい、これ！」

「僕」は得意満面で、新聞紙ごとお母さんに渡しました。

「なに？」と言って、首を傾げています。

「早く、早く！」。「僕」が言います。お母さんは包みを開けました。すると、あんなにやさしかったお母さんの顔がみるみる怖い顔になっていったのです。

「お前、これ、どうしたの？ この下駄、どこから持ってきたの？いくら貧乏したって、人様の物に手をかけるような子供に育てた覚えはないよ！返してきなさい！」

お母さんは体を震わせて怒っていました。

「ちがうよ、盗んでなんかいないよ。僕、買ったんだよ。本当だよ、下駄屋さんで赤い鼻緒の下駄、買ったんだよ」

「ウソつきなさい！いいかい、お前にどうしてそんなお金があるの。こづかいだつてあげていないんだよ。ああ、情けない、どんなに貧しくてもね、お前……」

「お母さん、本当に買ったんだよ」

「返してきなさい、私も一緒に行つて謝つてあげるから」

「買ったんだよ、買ったんだよ」

「どうして買えるのよ、お金はどうしたの？」

「お母さんは僕にお金をくれてる。お母さんがお弁当代つて毎日パンを買う十円くれるでしょ。そのなかから毎日五円ずつ貯めたんだよ。五円玉をタコ糸に通して、ずっと前から一枚一枚貯めていたんだよ。本当だよ。赤い鼻緒の下駄を買つて、お母さんをびっくりさせてあげようと思つて、ずっと内緒にしていたんだよ」

「僕」は泣きながら、一生懸命、説明しました。

「悪いことなんか、僕、絶対にしてない、してないよ」

「僕」は涙を流しながら、お母さんの割烹着にすがるように、そう言いました。

その話を聞きながら、お母さんの目から涙がぼろぼろ、下駄を包んだ新聞紙の上に落ちました。

それが「僕」が生まれてはじめて見たお母さんの涙でした。

余計なことはいりません。まだ、この歌を聞いたことのない方は、ぜひ聞いてみてください。

そう言えば、昔のお母さんはよく言いましたよ。お母さんは、お前をそんな子供に育てたつもりはないよ。つて。

どんなに貧しくたって、人様に迷惑をかけることはさせなかったお母さん、偉かったですねえ。

(編集部注・CD「かあさんの下駄」はテイ・チクエン・テイ・インメントより発売中です)

今年のふれあいコンサート

ふれあいコンサートの日にちが決まりました。

六月六日(土曜日) 六時半開演

場所 当山本堂

出演 フルーツ 深津 純子

ギター ファビアーノ・ド・

ナシメント

タブラ 逆瀬川 健治

※チケット代は、後日お知らせ致します。

ギター奏者のファビアーノさんは、ブラジル生まれ。現在アメリカで活躍している人だそうで、深津純子さんのご推薦です。

深津さんは、ご存知の館山市『ふるさと大使』。つい先日は館山・城山公園で演奏会がありましたね。

逆瀬川さんも何年もおいでになつていて、インド打楽器タブラの名演奏でお馴染みですね。

お忙しい人たちが日程を調整して、漸く決まりました。ご期待下さい。

お申し込みは、電話・メール、何でも結構です。